

おん詩の集を『丹骨』を賜ふらまはし、お

りかゝるべきにあらざらん。『丹骨』は、

こゝろを「度」に「守」は「想」を「反」し、

ちか、天國の「想」の諸篇が、織、

よ者の「傍觀」の「位置」を「踏」み、こゝろを「節」度

の「あ」の「み」に「な」づか「な」ま「す」。そ「し」こゝろの「あ」や「み」と

「熱」の「目」に「ま」か「せ」し「め」ま「は」た「し」て「未」だ「し」た

「位置」か「ら」世「界」を「入」る「宙」を「冷」静に「見」よ、い「つ」て

「み」よば「老」を「熱」の「詩」に「●」が「こゝろ」本「金」全「体」に「ゆ」ま「し」

た「つ」て「い」て、丹「精」の「う」つ「く」し「た」ま「さ」る「感」に「た」つ「た」

た「つ」て「い」て、丹「精」の「う」つ「く」し「た」ま「さ」る「感」に「た」つ「た」